様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成２５年　５月３１日現在

機関番号：１７６０１
研究種目：基盤研究(C)
研究期間：2010～2012
課題番号：２２５２００２６

研究課題名（和文）未来の存在論的身分に関する分析哲学的研究

研究課題名（英文）Analytical Research on the Ontological Status of the Future

研究代表者
伊佐敷　隆弘（ISASHIKI TAKAHIRO）
宮崎大学・教育文化学部・教授
研究者番号：５０２７４７６７

研究成果の概要（和文）：未来という時間の存在論的身分を明らかにすることを目指して，「因果関係の本性」，「自然の斉一性」，「自然法則の身分」などの問題に取り組んだ。まず，不在因果の検討を通して因果関係の本性について考察した。出来事個体間の因果関係は出来事類型間の関連性を暗黙の前提とし，結果は原因だけでなく背景条件にも依存する。或る出来事が何であるかということの内に既に他の出来事類型との関連性が含まれている。要するに，因果関係とは世界と人間とが共同して作り出した秩序（出来事類型間の関連）である。次に，自然の斉一性（帰納法の正当化）の問題に取り組んだ。未来に関する斉一性は知識が成り立つための条件である。しかし，「既に過去になってしまった未来」の斉一性から「まだ過去になっていない未来」の斉一性を導くことは循環論証であり，未来が斉一的でなく知識が成り立たなくなる可能性は常にある。要するに，未来は或る意味で既知であり，別の意味でまったく未知である。さらに，研究の進展に伴ない，「過去の経験から得られた知識を未来へ投射し，かつ，自らの未来の行為を意図する主体」である「心」の存在について考察した。心を物質から独立させるデカルトの議論は妥当ではない。また，本研究全体の背景として，20 世紀英米哲学における形而上学の盛衰（論理実証主義者や日常言語学派による形而上学批判から今日の分析形而上学への変化）およびカテゴリー論（自然法則や傾向性の分析を含む）について調査をおこなった。

研究成果の概要(英文):Aiming at the clarification of the ontological status of the future, I tackled the problems, such as the nature of causation, the uniformity of nature, the status of natural laws, and others. First, through examining the absence causation, I inquired into the nature of causation. The causation between event-individuals tacitly presupposes the relations between event-types. Effects depend on not only causes but also background conditions. To know what an event is already includes to know its relations to other event-types. To sum up, causation is the order (i.e. the relations between event-types) which the world and the humans jointly make up. Secondly, I grappled with the uniformity of nature, which has been expected to justify the induction. The uniformity concerning the future is essential to the possibility of knowledge. But inferring the uniformity of the future futures from that of the past futures is a circular reasoning and at any time there is a chance that the future will not be uniform. In short, the future is known in one sense but completely unknown in another sense. Thirdly, in the course of the progress of my research, new topics have appeared: the existence of the mind and the emergence of analytic metaphysics. The mind is the subject which projects into the future the knowledge gained through the past experiences and which intends its own future acts. I examined Descartes' argument that tries to make the mind independent of the body, and I showed it is invalid. Analytic metaphysics is a field where many philosophers are working. But in the early twentieth century metaphysics was severely criticized by logical positivists and ordinary language philosophers. I investigated what had caused this change. And lastly, I researched the category theory, which includes the analysis of natural laws and disposition.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
２０１０年度	500,000	150,000	650,000
２０１１年度	500,000	150,000	650,000
２０１２年度	400,000	120,000	520,000
総　計	1400,000	420,000	1820,000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：哲学，哲学・倫理学
キーワード：哲学原論・各論

１．研究開始当初の背景

未来の存在論的身分に関する分析哲学における主な立場は，①現在・過去・未来のすべてに４次元時空間として同じ実在性を認める４次元主義（クワインやサイダー），②現在と過去にのみ実在性を認め未来には可能性しか認めない可能主義（ブロードやトゥーリー），③現在にだけ実在性を認める現在主義（プライアーやスミス）の３つである。

しかし，このように「現在・過去・未来のどれが実在するか」を問うためには，まず，「そもそも現在・過去・未来とは何であるのか」を明らかにしておかなければならないが，上記①②③のいずれにおいても，この点の検討が不十分である。①②③では，現在・過去・未来を「一つの広がりをなす時間全体の部分」と見なした上で，それらの内のどの部分が実在するのかという仕方で問いが立てられている。しかし，未来の存在論的身分に限定しても，「自然の斉一性（帰納法の正当化）の問題」，「自然法則の身分の問題」，「因果関係の本性の問題」，「未来時制命題の真理値の問題」の少なくとも４つの課題が先決問題となる。つまり，①②③のように「実在するのか否か」という All or Nothing の問いを立てるのではなく，これらの課題の検討をとおして，現在・過去・未来はそれぞれどのような意味で「存在」しているのかを明らかにすることが必要である。要するに，従来の分析哲学において，「現在・過去・未来は（もし存在するなら）同じ意味で存在するはずだ」と暗黙の内に前提されているのに対し，本研究においては，そのような前提を置かない。

２．研究の目的

「自然の斉一性（帰納法の正当化）」，「自然法則の身分」，「因果関係の本性」，「未来時制命題の真理値」という４つの具体的問題の検討を通して，未来という時間の存在論的身分を明らかにすることが目的である。

さらに，最終的な目標としては，上記①４次元主義，②可能主義，③現在主義のいずれでもない立場，即ち，「存在」の多様性を認め，「現在・過去・未来はそれぞれ違った意味で存在している」と主張する立場を目指す。

３．研究の方法

約 140 点の関連文献を調査するとともに問題自体についての考察をおこなった。かつ，学会において研究発表をおこなって他の研究者からの批判を仰いだ。

４．研究成果

まず，（１）因果関係の本性と（２）自然の斉一性と（３）時間の本性について次のことが明らかになった。

（１）不在因果（不作為や生起しなかった出来事を原因・結果とする因果関係）を取り上げ，因果関係の本性について考察した。出来事個体間の因果関係は出来事類型間の関連性を暗黙の前提とする。結果は原因だけでなく背景条件（産出条件の現存と妨害条件の不在）にも依存する。不在因果とは妨害条件の不在が原因として際立った場合の因果関係である。或る出来事が何であるかということの内に既に他の出来事類型との関連性が含まれている。因果関係とは世界と人間とが共同して作り出した秩序（出来事類型間の関連）である。

（２）未来と知識の関係について考察した。自然の斉一性とは「場所の違い・経験の有無・時間の違いによらず同じ自然法則が成り立つ」ということである。空間的斉一性・認識的斉一性・過去に関する斉一性は「説明の良さ」や「自然の認識からの独立性」によって正当化できる。しかし，未来に関する斉一性は正当化できない。「既に過去になってし

まった未来」の斉一性から「まだ過去になっていない未来」の斉一性を導くことは循環論証だからである。経験が消滅的・時間的であるのに対し，知識は持続的であり時間を超えようとする。それゆえ，未来に関する斉一性は知識が成り立つための条件である。しかし，未来が斉一的でなく知識が成り立たなくなる可能性は常にある。つまり，未来は或る意味で既知であり，別の意味でまったく未知である。

（３）時間の線イメージの限界を明らかにし，さらに，物個体と出来事個体というカテゴリーに基づいて，「過去の確定性」，「現在は瞬間か」，「現在から過去への移行の目撃不可能性」という３つの問いを統一的に解明した。すなわち，①過去は出来事個体が現れて初めて出現する。出来事個体の変化・消滅不可能性が過去の確定性の源泉である。②過去の出現に伴い，過去でないものとしての現在が，その都度，異なる幅をもって出現する。③現在過去未来の区別以前の，我々の経験の場としての時間的パースペクティヴ（原型的〈現在〉）において，物個体は同一性を保ちつつ絶え間なく変化している。④過去は遡及的に出現しうるから，現在から過去への移行は目撃できない。

さらに，研究の進展に伴ない，（４）「過去の経験から得られた知識を未来へ投射し，かつ，自らの未来の行為を意図する主体」である「心」の存在について考察した。また，本研究の背景として，（５）２０世紀英米哲学における形而上学の盛衰，および（６）存在論的カテゴリーについて調査をおこなった。

（４）「心」の存在については，物質との関連性（心身問題）に焦点を絞り，デカルトの「物心二元論」について検討した。仮にデカルトが言うように「心の本質は『考えること』だけだ」としても，「この現実世界において私の心の存在がたまたま身体の存在に依存している」という可能性は排除できない。それゆえ，心を物質から独立させるデカルトの議論は妥当ではない。（この他，未来論および心身問題の一形態として「死後の生」について考察した。）

（５）２０世紀初頭の英米哲学において論理実証主義や日常言語分析学派から厳しく非難された形而上学は今日「分析形而上学」として復活した。なぜ復活できたのか。それは，「検証原理そのものの不備やクワインの全体論が検証原理から形而上学批判の力を奪ったこと」，「ストローソンの記述的形而上学が日常言語分析へ形而上学を持ち込んだこと」，「クリプキによって，様相概念（必然・偶然・可能）が認識論的概念（アプリオリ・アポステリオリ）や意味論的概念（分析的・総合的）に還元されないことが示されたこと」などのゆえである。

（６）現代の代表的な分析形而上学者であるジョナサン・ロウの４カテゴリー存在論について調査した。ロウは対象（実体的個体）・モード（非実体的個体）・種（実体的普遍）・属性（非実体的普遍）という４つの根本的カテゴリーを立てる。ロウは，「根本的カテゴリーの種類が少ない節約的な他のカテゴリー論（キャンベル，アームストロング，マルティンなど）よりも，４カテゴリー存在論は説明力の点で優れている」と主張する。即ち，①個体だけが因果関係に入りうるので，知覚はモードを必要とする。②モード（トロープ）は対象のあり方であって，その存在と同一性は対象に依存する。③自然法則とは，「種が属性によって特徴づけられる」ということである。④傾向性とは，「対象が，或る属性によって特徴づけられる種の実例である」ということであり，他方，生起状態とは，「対象が，或る属性の実例であるモードによって，特徴づけられる」ということである。ロウはこのようにして，対象・モード・種・属性の４つの根本的カテゴリーによって，①性質の知覚，②トロープの個別化，③自然法則の分析，④傾向性の分析を統一的に説明しようとする。細部については批判の余地があるが，カテゴリー論に基づいて統一的説明をおこなうことは，未来の存在論的身分を明らかにしようとする本研究にとって示唆するものが大きい。

以上の研究成果を振り返ると，上記「２．研究の目的」であげた４つの具体的問題のうち，「自然の斉一性」，「自然法則の身分」，「因果関係の本性」の３つについては，或る程度確定的な結論を得た。残る１つの「未来時制命題の真理値」については，ウカシェヴィッチの３値論理，ファン・フラーセンの超付値，マクファーレインや加地大介の時制付き真理値，クワインの永久文などに関する調査はおこなったが，まだ明確な結論には到達していないので，継続して研究中である。

５．主な発表論文等
（研究代表者，研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計５件）
①伊佐敷　隆弘，不在因果について，宮崎大学教育文化学部『紀要 人文科学』第 23 号，査読無，2010 年 9 月，pp. 1～15。

②伊佐敷　隆弘，自然の斉一性について，宮崎大学教育文化学部『紀要　人文科学』第 24 号，査読無，2011 年 3 月，pp. 1～24。

③伊佐敷　隆弘，心は身体ぬきで存在できるか，宮崎大学教育文化学部『紀要　人文科学』第 25 号，査読無，2011 年 9 月，pp. 1～17。

④伊佐敷　隆弘，日本における「死後の生」の４つの類型：因果応報の観点から，宮崎大学教育文化学部『紀要　人文科学』第 26 号，査読無，2012 年 3 月，pp. 1～21。

⑤伊佐敷　隆弘，ロウの４カテゴリー存在論（１），宮崎大学教育文化学部『紀要　人文科学』第 27 号，査読無，2012 年 9 月，pp. 1～14。

〔学会発表〕（計１件）
①伊佐敷　隆弘，なぜ無ではなく何かが存在するのか：20 世紀イギリス哲学における形而上学の盛衰，日本イギリス哲学会シンポジウム提題，2012 年 3 月 28 日。

〔図書〕（計１件）
伊佐敷　隆弘，時間，『哲学への誘い　第Ⅳ巻　世界経験の枠組み』（伊佐敷隆弘・松永澄夫共編）第１章，2010 年 10 月，東信堂，pp. 60～95。

〔産業財産権〕
○出願状況（計０件）

○取得状況（計０件）

〔その他〕
ホームページ等

６．研究組織
(1)研究代表者
伊佐敷　隆弘（ISASHIKI TAKAHIRO）
宮崎大学・教育文化学部・教授
研究者番号：５０２７４７６７

(2)研究分担者

(3)連携研究者